



AET1  
Asian and Middle Eastern Studies Tripos, Part IB

---

Easter 2021

---

## **Paper J5**

### **Modern Japanese texts 2**

*Answer **all** sections.*

*Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** answer booklet.*

### **STATIONERY REQUIREMENTS**

*20 page answer booklet*

*Rough Work Pad*

### **SPECIAL REQUIREMENTS TO BE SUPPLIED FOR THIS EXAMINATION**

*None*

**You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed to do so.**

## Section A

(1) Translate the following unseen text into English [35 marks].

「私はみんなとつながっていたいの」

今の若者にとって、LINEやツイッターなどのソーシャルメディアは、友だちとのつながりを保つのに欠かせなくなっている。つねにやりとりしてないと不安になる「SNS依存」が問題になることもある。ただ、こうした依存現象はかならずしも最近になってあらわれたわけではなく、一九九〇年代後半に携帯電話の普及が進んだ時期にも、また、日本だけでなく海外でもみられたものだ。たとえば、一九九九年のあるインタビュー調査に答えて、ノルウェーの一八歳の少女は次のように語っている。

もし、私がメッセージを受けとったら、すごく読みたくなるの。私はみんなとつながっていたいの。そう、だから、もしシャワーを浴びていてメッセージをもらったら、絶対に読まなきゃならないの。もし、私がメッセージを送って、すぐに返事が返ってこなかったら、それはもう悲惨よ。(カツツ/オークス編 二〇〇三)

Question 1 continues...

どうしてこのような心理が生じるのかはのちほどあらためて考察することにして、ここではまず、これが少女の発言であることに注目したい。仮にこれがマッチョな少年の発言であったとしたら、どうだろう。たとえば『ドラえもん』のジャイアンが、「俺はみんなとつながってほしいんだ、メッセージにすぐ返事がなかったらもう悲惨だぜ」と泣き言をこぼす様子を想像してみたい。のび太ならまだしも、ジャイアンがそんなこと言うなんて男らしくないなあ、と感じられはしないだろうか。

そこには、男性と女性の友人関係についての、型にはまった見方——ジェンダー・ステレオタイプ——が潜んでいるように思われる。たいした用もないのにだからメッセージのやりとりを続け、いちいち相手の反応を気にして、ささいなことで不安になってしまう。そんな表面的で脆弱な友だちづきあいは「女々しい」し、「男らしく」ない。いささか誇張していえば、そのようなステレオタイプである。ひと昔前には「女の長話」とか「女の長電話」とかいわれていたことからわかるように、こうした見方はアナログ時代からデジタル時代へと、かたちを変えながらも受け継がれてきたものだ。

はたして実態はどうなのか。もちろん男性でも女性でも個人差は大きいだろうが、全体的・平均的にみれば、友人とのつながり方にこのステレオタイプどおりの男女差が認められるのだろうか。まずは、この点を調査データから検証してみよう。

#### ▼ 友人とのつながり方の男女差

分析に用いるのは、青少年研究会という社会学者のグループが、二〇一二年に東京と神戸に住む一六

(TURN OVER)

Question 1 continues...

19歳の男女を対象に行った質問紙調査のデータである（以下、「青少年調査」と呼ぶ）。

はじめに、携帯電話やスマートフォンを使って、週にどれくらいプライベートな（仕事・学業関連以外の）メールを送信しているかを見よう。平均値は男性三八通・女性四九通で、明らかに女性のほうが多い。これは統計学的な観点からも有意な——つまり誤差の範囲内とはみせない——差である（以下でも「差がある」「多い・少ない」などと記述する場合は、統計学的に5%水準で有意と分析されたもののみをとりあげる）。また、フェイスブック等のSNSに登録されている友人数も女性のほうが多く、ソーシャルメディア上でも男性より活発に友人とつながっている様子が見える。

TSUJI DAISUKE, 'Tsunagaru', *Jendā de manabu shakaigaku* (Sekaishisōsha, 2015) pp.189-191.

**Vocabulary (question 1):**

LINE social messaging application (similar to WhatsApp)

欠く to lack

依存 dependence

ドラえもん Doraemon (character and name of Japanese anime series)

ジャイアン Jian (character in Doraemon)

泣き言 complaint

のび太 Nobita (character in Doraemon)

はまった be hooked on, caught up in

潜む to lurk

ささい trivial

いささか a little

誇張 exaggeration

受け継ぐ to succeed, take the place of

統計学的 statistically

範囲 range, scope

水準 standard

(TURN OVER)

## Section B

(2) Read the **unseen** text carefully and answer the following questions in **English** in as much detail as you can (take content from the text only): [35 marks]

「じつは子供部屋は日本だけのものです。諸外国の住宅に子供部屋はありません。あるのはベッドルームという個室です。「おなじではないか」といわれそうですが、あきらかに意味がちがう。

欧米ではリビングルーム、ダイニングルームとそれにベッドルームを基本形として部屋が構成されます。住宅のおおまかな広さや規模をしめすのはベッドルームの数です。寝室が五つなどという家はかなり大きな家です。彼らはまず夫婦あたりの生活を出発点に住まいを考えます。自分たちの寝室と食堂と居間をどうするかが第一なのです。けれど子供を夫婦の寝室で寝かせるわけにはいかないので、子供がひとりならもう一つ寝室を、ふたりなら二つというぐあいに住まいを發想していくわけです。子供の個室も原則的にはそこは寝室なのです。

けれど日本の子供部屋はそもそも寝室ではありませんでした。そこは勉強部屋だったのです。

子供部屋が誕生するのはいまから半世紀まえのことです。それは一九五九年にミゼットハウスという名で売りだされたプレハブの小さな「住まい」

Question 2 continues...

でした。窓はついていますが、庭などに置かれているいまの物置小屋とおなじような、ハウスとは名ばかりのものでした。

けれど、これが爆発的に売れました。当時、庶民の住宅では子供に一部屋あたえる余裕などない。けれど受験戦争を勝ち抜いてもらわなくてはならない。そこで親たちはこの庭に設置するプレハブにとびついたので。当時は勉強するために部屋に入り、寝るときは母屋にもどっていくといった使われ方もしていました。この部屋が「ハウス」という商品名で売られていたことは、のちにまるで一戸の家のようにりっぱになる子供部屋を象徴しているかのようです。

それ以降、親が子供にきちんとした個室＝勉強部屋をあたえることはひとつの義務になりました。たしかに住まいはテレビを中心にノイジーな空間に変化していましたから、個室は勉強に集中するためにも有効だったといえるでしょう。

### 川の字に寝る文化

一九八九年、子供部屋のありかたを問い直す大きな出来事がありました。事件は都内にあるごくふつうの住宅で起きました。二階の子供部屋に女子高校生が四〇日間監禁され殺されたのです。衝撃的だったのは階下には両

(TURN OVER)

Question 2 continues...

親と子供がふつうに生活していたという事実です。子供部屋を根城にしていた少年たちは、電信柱づたいに直接バルコニーから入ることもあったと報道されています。

これは子供部屋がたんに子供の個室ではなく、その家から独立した空間、家のなかにある「もう一つの家」のような存在になっていたことを示しています。この事件が衝撃をあたえたのは犯人たちの残忍さだけでなく、住まいのなかで子供部屋が独立し、親のコントロールがまったくおよばないブラックボックスのようになってしまった事実でした。事件によって自分の家をあらためて見直し、おmoiあたるものがある親も少なくなかったのです。

FUJIWARA TOMOMI, *Sumai kara kazoku o miru* (NHK 2002), pp.32-34.



**Vocabulary (question 2):**

監禁する to confine

根城 home base, place where one bases oneself

電信柱 telegraph pole

残忍 cruelty

(TURN OVER)

Question 2 continues...

1. According to the author, what is the thought process through which married couples in the west conceive of their home's layout? **[8 marks out of 35]**
2. What was the primary purpose of children's rooms in Japan? Why did they sell 'explosively'? **[8 marks out of 35]**
3. What became a duty for parents to provide to their children and what was the reason for this? **[4 marks out of 35]**
4. Describe the incident that prompted a rethink of children's rooms. **[8 marks out of 35]**
5. What did this incident bring to light and how did parents react? **[7 marks out of 35]**

### Section C

(3) Translate **ONE** of the two following passages from **seen** texts into English. [30 marks]

#### Passage A

### 第一夜

こんな夢を見た。

腕組みをして枕もとに座っていると、あお向きに寝た女が、静かな声でもう死にますと言う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の柔らかなうりざね顔をその中に横たえている。真つ白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇の色はむろん赤い。とうてい死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますとはつきり言った。自分もたしかにこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上からのぞき込むようにしてきいてみた。死にますとも、と言いなから、女はぱつちりと目を開けた。大きな潤いのある目で、長いまつ毛に包まれた中は、ただ一面に真つ黒であった。その真つ黒な瞳の奥に、自分の姿が鮮やかに浮かんでいる。

(TURN OVER)

Question 3 passage A continues...

自分は透き通るほど深く見えるこの黒目の色沢を眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、ねんごろに枕のそばへ口をつけて、死ぬんじゃないかなろうね、大丈夫だろうね、とまたき返した。すると女は黒い目を眠そうに見張ったまま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、しかたがないわと言った。

じゃ、私の顔が見えるかいと一心にきくと、見えるかいつて、そら、そこに、写ってるじゃありませんかと、にこりと笑ってみせた。自分は黙って、顔を枕から離した。腕組みをしながら、どうしても死ぬのかなと思つた。

しばらくして、女がまたこう言つた。

「死んだら、埋めてください。大きな真珠貝で穴を掘つて。そうして天から落ちてくる星の破片を墓標に置いてください。そうして墓のそばに待っていてください。また会いに来ますから。」

自分は、いつ会いに来るかねときいた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。——赤い日が東から西へ、東から西へと落ちてゆくうちに、——あなた、待っていていられますか。」

自分は黙つてうなずいた。女は静かな調子を一段張り上げて、

Question 3 passage A continues...

「百年待つていてください。」と思いつつ声で言った。  
「百年、私の墓のそばに座って待つていてください。きつと会いに来ますから。」  
自分はただ待つていると答えた。すると、黒い瞳の中に鮮やかに見えた自分の姿が、ぼうつと崩れてきた。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思ったら、女の目がぱちりと閉じた。長いまつ毛の間から涙が頬へ垂れた。——もう死んでいた。自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘った。真珠貝は大きな滑らかな縁の鋭い貝であった。土をすくうたびに、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿った土の匂いもした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかい土を、上からそつとかけた。かけるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。それから星の破片の落ちたのを拾ってきて、かろく土の上へ乗せた。星の破片は丸かった。長い間大空を落ちていた間に、角が取れて滑らかになったんだろうと思った。抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖かくなった。  
自分は苔の上に座った。これから百年の間こうして待つているんだなと考えながら、腕組みをして、丸い墓石を眺めていた。そのうちに、女の言ったとおりの日が東から出た。大きな赤い日であった。それがまた女の言ったとおりの日が西へ落ちた。赤いままでのつと落ちていった。一つと自分は勘定した。

NATSUME SOSEKI, *Yume jū ya* (Daiichigakushūsha 2019), pp.120-122.

(TURN OVER)

Passage B

下人は、大きなくさめをして、それから大儀そうに立ち上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇とともに、遠慮なく吹き抜ける。丹塗りの柱にとまっていた蟋蟀も、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、頸を縮めながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして、門のまわりを見回した。雨風の憂えのない、人目にかかる恐れのない、一晚楽に寝られそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思っただからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った梯子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰に下げた聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、わら草履をはいた足を、その梯子のいちばん下の段へ踏みかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、



Question 3 passage B continues...

その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だという事実さえ疑われるほど、土をこねて造った人形のように、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にくろがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ほんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影をいっそう暗くしながら、永久におしのごとく黙っていた。

AKUTAGAWA RYUNOSUKE, *Rashōmon* (Shinchōbunko, 2005), pp.88-90.

**END OF PAPER**

**Page 16 of 16**